

昔むかし、王さまが、寝室にきつねがあらわれた夢を見ました。朝になると、王さまは、親戚や大臣や占い師をぜんぶ集めていました。

「わしは、ゆうべ、寝室にきつねがあらわれた夢を見た。これはいったいどんな意味があるのか、夢判断をしてくれないか」

けれども、王さまが納得するような夢判断をした者はいませんでした。そこで、こんなおふれを出しました。

「王の見た夢の意味を解き明かした者には、ばく大なほうびをあたえ、高い地位につかせる」

おふれは、あらゆる町や村に伝わりましたが、王の夢の意味を解き明かすことができずた者はひとりもいませんでした。

長いことたったある日のこと、ひとりの若いお百姓が、夢判断を試みようと思いい立ちました。お百姓は、運を天に任せて村を出ました。

お百姓が峠にさしかかると、大きな毒へびがいつぴき、ゆく手をさえぎりました。お百姓は、

「へびどん、道を開けてくれ。おれは、王さまに夢判断をしてあげに行くんだ」といいました。

「あら、国じゅうの占い師がよつてたかつて分からなかったものが、あんたに分かるわけがない。でも、わたしが、あの夢の意味を教えてやってもいいよ。ただ、ひとつ条件がある。あんたが王さまからもうほうびの半分を、わたしによこすんだよ」

「へびどん、わかった。ほうびの半分をきつとあんたにあげるよ。さあ、夢判断をしておくれ」

へびは、お百姓に夢の意味を教えると、どこかへ行ってしまいました。

お百姓は、まっしぐらにお城に行くと、王さまにいいました。

「王さまのごらんになった夢の意味を解き明かしてみたいと思います。王さまは、寝室にきつねがあらわれた夢をごらんになった。きつねはずるい生き物です。これは、王さまのご家来たちの中に、ずるい者やうそや裏切りが増えてきたということです。こいつをちゃんと正しておかねばなりません」

王さまは、お百姓の夢判断を大いに喜んで、たくさんの方ほうびと高い位をあたえました。そして、お百姓を村へ送り返すと、手をつくして王国をもとどおりに正しました。

お百姓は、村に帰るとちゆう、ふと考えました。

「ほかの道を通って帰ろう。でないと、ほうびの半分を、あのへびにくれてやらねばならんからな」

お百姓は、道をそれて家に帰り、ほうびをぜんぶ自分の物にしました。

しばらくして、王さまは、また夢を見ました。それは、お城に、きらきら光る剣がぶらさがっているという夢でした。朝になると、王さまは、あのお百姓のもとに家来をつ

かわしました。お百姓は、

「こまったぞ。このまえは、あのへびが助けてくれたが、おれはあいつをだましてしまったからなあ。まあいいや。もういつペンあの道を行ってみよう。へびに会えるかもしれない」と考えました。そして、すぐに出発しました。

峠まで来ましたが、へびはいませんでした。お百姓は、大きな声でよびました。すると、すぐにへびがあらわれて、

「あら、約束破りどん。あんた、わたしにほうびをくれようとせず、顔を出しもしなかったじゃないか。こんどはいつたい何だね」といいました。お百姓は、心の底から後悔して、王さまの新しい夢のことを話しました。すると、へびはいいました。

「夢の意味を教えてやってもいいよ。でも、あんたが王さまからもうほうびの半分を、こんどはかならずわたしによこすんだよ」

お百姓が承知すると、へびは夢の意味を教えて、どこかへ行ってしまうました。

お百姓は、まっしぐらにお城に行くと、王さまにいいました。

「剣というのは、切ったりついたりして血を流すものです。これは、この国に戦いが起こることです。敵が剣を持って王さまを取り囲み、この国をほろぼすかもしれません。この根を早く断っておかねばなりません」

王さまは、お百姓の夢判断を大いに喜んで、たくさんのほうびと高い位をあたえ、ひとりの剣もあたえました。そして、手をつくして王国を守りました。

お百姓は、ほくほくしながら帰って行きました。けれども、とちゅうで悪い心が芽生えました。

「あのへびに半分やることはない。あいつが変なまねをしたら、この剣をぬいてずたずたにしてやろう」

峠まで来ると、へびが行く手をさえぎりました。お百姓は、ひとこともいわず、すごい勢いでへびに切りつけました。剣はしっぽに当たって、へびは逃げ出し、自分の穴にもぐりこみました。お百姓は、のんびり家に帰って、気楽な暮らしを始めました。

しばらくして、王さまは、また夢を見ました。それは、お城の中で雌牛が子牛を生んだ夢でした。王さまは、すぐにお百姓のもとに家来をつかわしました。お百姓は、後悔しながら峠に出かけて行きました。何度もよんだあげく、ようやくへびがすがたをあらわしました。

「やい、裏切り者。親切にしてやったお札に、わたしを殺そうとするなんて。いったいまた、どうしてのこのこやって来たんだい」

「まことにすまなかった。どうか水に流して、もう一回だけ夢判断をしておくれ」
お百姓は、ひたすら謝って、たのみました。すると、へびはいいました。

「夢の意味を教えてやるよ。でも、あんたが王さまからもうほうびの半分を、こんどはかならずわたしによこすと、約束おし」

お百姓が約束すると、へびは夢の意味を教えて、どこかへ行ってしまいました。

お百姓は、まっしぐらにお城に行くと、王さまにいいました。

「雌牛が子牛を生むということは、国が治まっていて、ご家来たちはおとなしく王さまに従っているということです。あぶないことは何もございません」

王さまは、お百姓の夢判断を大いに喜んで、これまでよりもっとたくさんのおうびをあたえました。

お百姓は、おうびを持ってまっすぐへびの所に向かいました。そして、おうびをぜんぶへびの前に積みあげました。へびはいいました。

「わたしは、おうびが欲しかったわけじゃない。あんたを試したかっただけさ。でもね、あんたのしたことは、あんたのせいじゃなかったんだよ。最初、この国には、うそや裏切りがはびこっていた。だからあんたも、私を裏切って行ってしまった。次には、戦いや流血ざたがせまっていた。そこであんたまでわたしを殺そうなんて考えたんだ。でも、こんどは国が治まって平和になっていった。ごらん、あんたは、わたしにおうびをくれようとやって来たじゃないか。あんたは、こんなことわざを聞いたことがあるかい。『上（かみ）のすること下（しも）もする。主（あるじ）がそうなら道具もそう』ってね」

やがてふたりは別れて行きました。けれども、今では、ふたりは友人同士でした。

つい昨日も見たのですが、へびとお百姓がならんですわって、仲良くおしゃべりしていましたよ。

原話：『世界の民話30 パキスタン』鈴木満訳／ぎょうせい
再話：村上郁